

所がみうけられる。ここでは少々紙面をさいて第7章を取り上げてみよう。はたして著者が指摘するほど近世山村の二面性があらわれていたであろうか。

「山留め」「山開き」文書をもとに前期林業集落の時期を寛永一天和期(1624—1682)、後期林業集落の時期を元文一寛政期(1736—1789)とし、その中間の林業衰退期を農業だけに依存した前期農業村落の時期としている。ところが、こうした時期設定にもかかわらず、林業が衰退している時期に林業活動が非常に活発であったことをうかがわせる事例が随所に示されている。たとえば、元禄期から笹板と曲物の買占商人が文書にあらわれてくるとして、同8—16年(1695—1703)までは大間々町の彦兵衛(以下略)等の商人名が列挙してある(p.287)。また、正徳元(1711)年に運上金をモミ板1枚に永1文、雑木板1枚に永5厘とし、この年だけでもモミ板7,230枚、雑木板815枚、この運上金は7貫67文になっている(p.288)。とあり、とても農業だけに依存した時期とは考えられない。

ところで、著者の意図とはかけ離れるかもしれないが、事例研究集成を読む楽しみは、各編を読者の勝手な思考のもとで読み比べることにある。たとえば、第7章と第9章。前者は先に示したように山村(片品川流域)で、林村期と農村期が交互に、後者は臨海集落(九十九里浜)で漁村期と農村期が交互にあらわれる。ところが新田開発の時期が違うのである。前者では林村期に人口が増え、その食料確保のために新田開発が行われるのに対して、後者では漁村(豊漁)期に人口が増えるのだが、その時期に新田開発は行われずに農村(不漁)期に開発が行われる。林民と漁民の定着性の違いにその原因があるのであろうか。山村と漁村の集落発達史を考える上において興味深い事例となっている。

また、新田開発農民の出身地に焦点をあてて読むと意外な事実も明らかにされる。大半の新田村において新田百姓の出身地は第1章の第4図(小川新田)、第5図(新町新田)であらわされているように、新田の周辺地区からの流入である。ところが、茨城県鹿南砂丘にある柳川新田の場合(第10章)、嘉永2(1849)年に銚子に漁業出稼していた越後人を120名も入植させ、その家族を国元から呼びよせている。また、安政3(1856)年に八丈島で新田百姓を募集して10戸、41名の入植があった。漁民と農民の出会い、そして移住。近世の地域間交流の実態を究明し

ようとする者にとって、その間の事情、その後の展開等を追跡したくなるような刺激的な記載である。

さて、随分と横道にそれてしまったが、最後に一言付け加えておきたい。本書はオーソドックスな新田開発研究を志す者にとって必読の書であることは言うまでもないが、歴史地理学初心者にとっても格好の入門書になっている。フィールドワークをかさねて独自の理論を構築する過程、対象地域の自然環境を重視する立場、古文書のあくなき収集とその利用、図表の美しさ、等々、学ぶべき点が多い。

(溝口常俊)

山田安彦著 古代の方位信仰と地域計画 古今書院 1986年4月 A5判 290頁 3,800円

この書を読みながら、古代を探ることと想像との境界線を引くことのむずかしさを痛く感じないわけにはいかなかった。つまり古代研究は他の時代に比較して史料の少ない分野であるため、想像がふくみやすい空間である。本書の主題である方位論については、テーマとしてはことさら珍しくはない。最近の大衆向けの古代関係の書籍にはよくみられるものである。例えばある古墳と石造物を結ぶと正南北でそれに直交する線の上に、ある山と神社がのる。それゆえにこの南北線と東西線は意味のある線、つまりは神の道であるといった類いのものである。そのような試みが少なくないにもかかわらず、これぞという説が認知されないのは、その手続きに基本的な欠陥か、ないしは甘さがあるためである。ということは、古代において方位がなんとなく意味をもっていたことは感じられても、それを証明するまでの過程が想像以上に困難であることによる。

だが、方位論はすぐれて地理的な問題である。同時に歴史的な所産でもある。その点からいえば、歴史地理学の立場から古代の方位論を探求しようとする著者の意図は正しいといえてよいであろう。

著者の古代歴史地理学の専門家としての見識と良心をもって本書が著わされたことは、随所に「偶然とはいえないような、意義付けがあるように思われる」(143頁)とか「まったくの偶然であろうか」(160頁)、あるいは「かかる配置を偶然の結果として見捨ててよいものであろうか」(166頁)、さらには「それとも偶然の一致なのか」(212頁)という表現からうかがいしることができる。だが、このような著者の慎重な言い回しとは裏腹に、「偶然」でない

ことを読者にいかに説くかが、このようなテーマを選んだ著者の果たすべき任務ではないかと、ふと考えこんでしまう。しかし、そのような評者の苦渋は、本書を成した著者がすでに味わったはずのものであり、それほど方位論という主題は見かけ以上に難解であるというべきである。

以下、具体的に古代に関する問題点を挙げてみたい。本書の構成は次のようになっている。

序章 新しい歴史地理学への模索

第一章 歴史地理学における地域生態系と地域体系

第二章 古代日本の社会倫理と景観構成

第三章 都域的集落の機能と景観の象徴

第四章 冬至太陽出没方位と古代地域の空間構想

第五章 位置選定の始原的要因

第六章 方位認識と胆沢城を中心とした地域空間構成

第七章 磐座（石蔵山）信仰と平泉居館集落造営構想

第八章 北辰信仰と猪鼻居館集落計画の理念

結びにかえて——今後への展望

序章以下第二章までは著者の方法論を示したものであり、それぞれに傾聴すべき内容をもつとはいえ、古代の方位論の具体的な論証と直接に関わりをもつものではないので、ここでは第三章以下を対象としたい。

(1) 鹿島・香取神宮の要石について天から降ってきたという伝承があるから「要石は天円地方説と関係が深く、要石は天円を支える主柱の地上における礎石的機能を果たすもの」（121頁）と古代人に信じられていたという。だが、古代日本で中国の宇宙観である天円地方の思想が実際に意味をもっていたのかどうかという論証を欠くわけにはいかないであろう。しかしそれについて語る史料を評者はしらない。仮に天円地方というコスモロジーがわが国の古代に人々の信じる場所であったとしても、天円地方という観念において天を支える柱というものについては検討の余地はある。評者のまったくの管見の事例にすぎないが、『淮南子』天文訓に「天柱は折れ、地維絶え、天は西北に傾く」とあるが、ここでは天柱とは不周山という山のことをいう。つまり要石なる石を天柱とみなすには、石を天柱となす事例のようなものを媒介項として、想定への足がかりとする手続きはどうしても必要であろう。

(2) 長岡京の南に営まれた山城国府について、推定復原されている国府域の中央南北線の正北の延長線上、府域北境界線から約1,850メートルのところに式内社向神社があり、西の境界線から西方約600メートルに長岡天神が勧請され、また府域の東北端から西1,550メートルのところに式内社走田神社があるとして、「式内社である場合、いずれも国府と関連性がないとは断定しえないであろう」（133頁）という。著者の意図は国府とその周囲の神社とが一体的な関係をもって成立したことを述べようとしていることはよく理解できる。しかし「関連性がないとは断定しえないであろう」という表現は論証とはならないであろう。なぜならば「関連性があるとも断定しえない」のであるから。せめて、その関連性を説くためには、府域の復原がかなり正確であるという確証と、上記の各神社への距離が古代の尺度で説明できるかどうかという検討は避けることはできないであろう。

(3) 137頁には大將軍について記されているが、『拾芥抄』や『山城名勝志』の記事をあげ、王都の平安鎮護のための都城の四至の守護に大將軍堂が建立されたという。しかし、『拾芥抄』と『山城名勝志』の記述を少し注意して読むか、あるいは大將軍社（堂）を地図上におとすと明らかなように、同一のものは、今日の北区にある大將軍八神社だけで、他は異なるものである。この点からも宮都の四方に大將軍社が配されたことは疑わしい。おそらく平安京の成立と直接関係するのは、唐の長安を模倣して、宮の西北におかれたものだけで、上記の北区のものがそれに相当するのであろう。

(4) 141頁から143頁にかけては、常陸国府の位置選定に際して、夏至および冬至の日出と日没の方位を勘案されていることを想定している。つまり、国府からみて冬至の日出の方位のところに、鹿島神宮の祭神である武甕槌神が鹿島に上陸した地点、「明石の浜」があり、その反対方向、すなわち国府からみた夏至の日没の方位は筑波山の山頂の少し北寄りであり、また夏至の日出の方位は式内社酒列磯前薬師菩薩神社と大洗磯前薬師菩薩神社との間であり、その反対の方位、つまり冬至の日没の方位に富士山があるという。いわれてみればそのようにも思われるが、疑問がやはりともなう。というのは、本書の第11図によると常陸の国府のあった石岡市（著者は方位の算出の基点として推定復原された国府の南境

界線の中点をとっている)と富士山との距離は約168キロであるが、両者を結ぶ線はさらに延長して酒列磯前薬師菩薩神社と大洗磯前薬師菩薩神社との間にこななければならない。果たして古代の測量技術でそのようなことが可能であろうか。だが、これはあくまでも評者だけの疑問であって、そのようなことが可能であれば、著者の推論はより具体性をもつことになることはいうまでもない。しかしそのためには古代の測量技術の水準の問題や、夏至・冬至の日出、日没の方位が古代都市の造営に関わった可能性をわずかも示唆する史料の提示はどうしても必要であろう。

(5) 崇神天皇陵の「中軸線はだいたい冬至の日の出方向をむく」(159頁)とあるが、この場合も古墳の造営に冬至の日出の方位が決定的な要素であることを、数多くの古墳の方位から詳細に導き出すという操作を欠くわけにはいかない。

(6) 藤原京のプランについても著者は、朝堂院の十二堂を圍繞する中庭中央からみると香具山山頂を見通して、冬至の旭日を拝しうることを指摘する(166頁)。その通りかもしれないが、それならば朝堂院の中庭を基点とする意義づけを無視してはこのような想定は説得力をもたない。174頁では平城京の場合をとりあげ、ここでは大極殿と内裏の間から冬至の日出の方向をみると高円山があるという。藤原京と平城京とでは冬至の日出をみる位置がちがうのはどういうわけなのか。宮都のプランを対象とするとき、まず第一に意味をおくべき位置は大極殿であろうと思われ、その位置がどのようにして選定されたかについて考察すべきであろう。しかしこの問題について明確な答が得られていない現状では、著者の模索は貴重な試みであり、別の視角からの検討も経た上で、納得できる見解が示される日が待遠しい。ついでに藤原京といわゆる大和三山との関係に触れておくと、香具山のことを『万葉集』に「芳來山」(巻3—257)とあることから、三山を三神山とみて神仙思想の影響をよみとりうるかもしれない

というのが、想定しうる限界であろうかと思う。同じことは平城京遷都の詔にいう「三山、鎮を作す」の意味も藤原京の事例から類推すればやはり三神山を意識した可能性がある。

(7) 個々の事実関係と論証の手続きについて、評者が指摘したい点は他にも少なからずある。しかし著者の意図はそのような<些細>なことにはないように思われる。本書の中で説こうとされていることは、とにかく宮都や国府のプランは、「平穩息災招福が人間の究極の願望であるから、その達成成就のために、宇宙・自然の摂理条理に地上の諸施設を合致させるように考え、神の意に沿うようにして神には祈願した」(157頁)と思われるふしがあることを、神社、寺院あるいは山の位置との関係から説明できるかもしれないという点にあるのであって、いわば問題提起の書として読むことが、本書の評価をより高めるであろう。

(8) しかし、なおそのことに言及することが許されるならば、われわれ後学のものが本書の方法論に魅惑され、また、この稿のはじめに書いたように、「偶然かもしれない」という著者の慎重な表現を念頭において、著者のいう宇宙・自然の摂理というもの、個々の宗教的な思想として具体化したものであり、それならばわが国の古代において宮都や国府の造営に最も重視されたのは何なのか、あるいは著者のいう「神」の実体はどのようなものか、ということに視点のより深い掘り下げを試みないままに、古代都市の周辺にある宗教的な痕跡をただむやみに解釈することになりかねないのではないかと危ぶまれる。だが、そのような慎重な目くばりさえすれば、本書は古代歴史地理学研究の新しい視点をはらんでいて、教えられる点の方がむしろ多いというべきであろう。貴重な先学の業績にあえて書評を呈したのは、その驥尾に付す者として本書の刊行が少なからず意義をもつものと思いたいたためである。

(千田 稔)